



肺がん 2021年3月版

Oncologist Fact Report

肺がん診療医師の治療実態・情報収集に関する
調査レポート

株式会社メディカルトリビューン

Lung cancer '21

目次

	ページ
1 肺がんに関するレポートご提供の背景	4
2 調査概要	7
● 回答者属性	9
3 エグゼクティブサマリー	20
4 調査結果詳細	
4-1 ● 第一部：肺がんの治療実態	
– IV期 非小細胞肺がんドライバー遺伝子変異/転座陽性	23
– IV期 非小細胞肺がんドライバー遺伝子変異/転座陰性・小細胞肺がん	41
– 処方に至るまでのカスタマージャーニー	65
4-2 ● 第二部：肺がんを診察する医師の情報収集実態	
– コロナ禍の情報収集実態	97
– 製薬会社 MR評価	122
– キャズム理論を参考にした肺がん診療医のグループ分け	139

調査概要

情報収集パート 比較対象調査*

調査
対象者条件

1. 診療科が呼吸器内科、呼吸器外科、腫瘍内科である
2. 病床数20床以上の医療機関に勤務している
3. 直近1年未満に、肺がんの患者を1人以上診察している

1. 日常的に診療を行う医師
2. 肺がんの診療医は除く

標本抽出

Medical Tribune Web医師会員より抽出

左記同様

調査手法

Webアンケート調査

左記同様

サンプル数

209ss

812ss

調査時期

2021年2月中旬～下旬

左記同様

* P.91以降の情報収集実態パートでの比較として実施した調査（肺がんの医師を対象としたものは別調査）

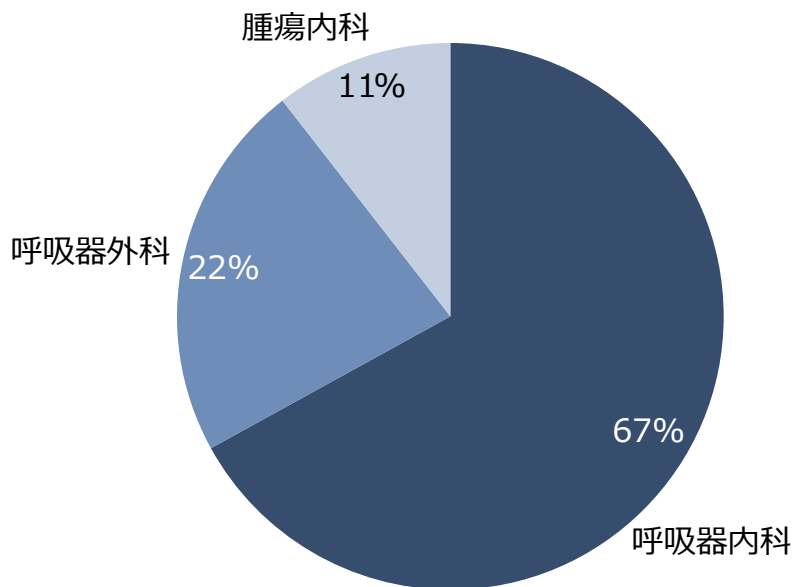
2014年以降に上市されたIV期の非小細胞肺癌および進展型小細胞肺癌の薬剤を対象とし、過去の処方経験や、処方に至るまでの経路を聴取した。

適応疾患	一般名	総称名	企業名	大分類	中分類	上市年月
非小細胞肺癌 ドライバー遺伝子変異/ 転座陽性	セリチニブ	ジカディア	ノバルティス ファーマ	分子標的治療薬	ALK阻害薬	2016年5月
	ロルラチニブ	ローブレナ	ファイザー	分子標的治療薬	ALK阻害薬	2018年11月
	ダブラフェニブ	タフィンラー	ノバルティス ファーマ	分子標的治療薬	BRAF阻害薬	2016年6月
	トラメチニブ	メキニスト	ノバルティス ファーマ	分子標的治療薬	MEK阻害薬	2016年6月
	オシメルチニブ	タグリッソ	アストラゼネカ	分子標的治療薬	EGFR阻害薬	2016年5月
	ダコミチニブ	ビジンプロ	ファイザー	分子標的治療薬	EGFR阻害薬	2019年3月
	テポチニブ	テプミトコ	メルクバイオ ファーマ	分子標的治療薬	MET阻害薬	2020年6月
	カプマチニブ	タブレクタ	ノバルティス ファーマ	分子標的治療薬	MET阻害薬	2020年8月
	エヌトレクチニブ	ロズリートレク	中外製薬	分子標的治療薬	ROS1/TRK阻害薬	2019年9月
非小細胞肺癌 ドライバー遺伝子変異/ 転座陰性	ニボルマブ	オプジーボ	小野薬品工業	免疫チェックポイント 阻害薬	抗PD-L1抗体	2014年9月
	ペムブロリズマブ	キイトルーダ	MSD	免疫チェックポイント 阻害薬	抗PD-1抗体	2017年2月
	アテゾリズマブ	テセントリク	中外製薬	免疫チェックポイント 阻害薬	抗PD-L1抗体	2018年4月
	イピリムマブ	ヤーボイ	ブリストル・ マイヤーズスクイブ	免疫チェックポイント 阻害薬	抗CTLA-4抗体	2015年8月
	ネシツムマブ	ポートラーザ	日本化薬	分子標的治療薬	抗EGFR抗体	2019年11月
進展型小細胞肺癌	デュルバルマブ	イミフィンジ	アストラゼネカ	免疫チェックポイント 阻害薬	抗PD-L1抗体	2018年8月

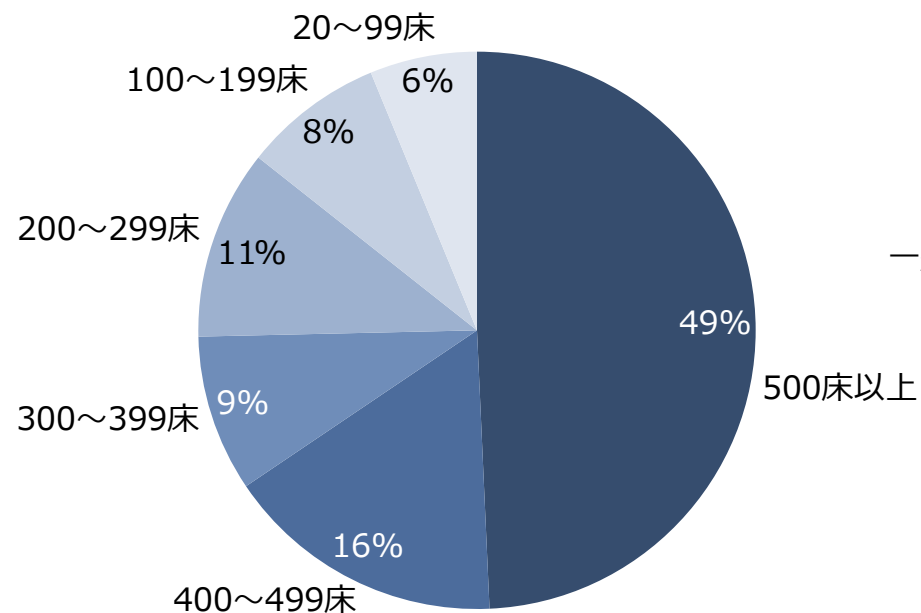
呼吸器内科医が最も多く、全体の約7割を占めた。
 病床数は、500床以上の施設が約半数を占めた。
 勤務先施設は、大学病院と国公立病院がそれぞれ約3割、残り4割が一般病院だった。

(n=209)

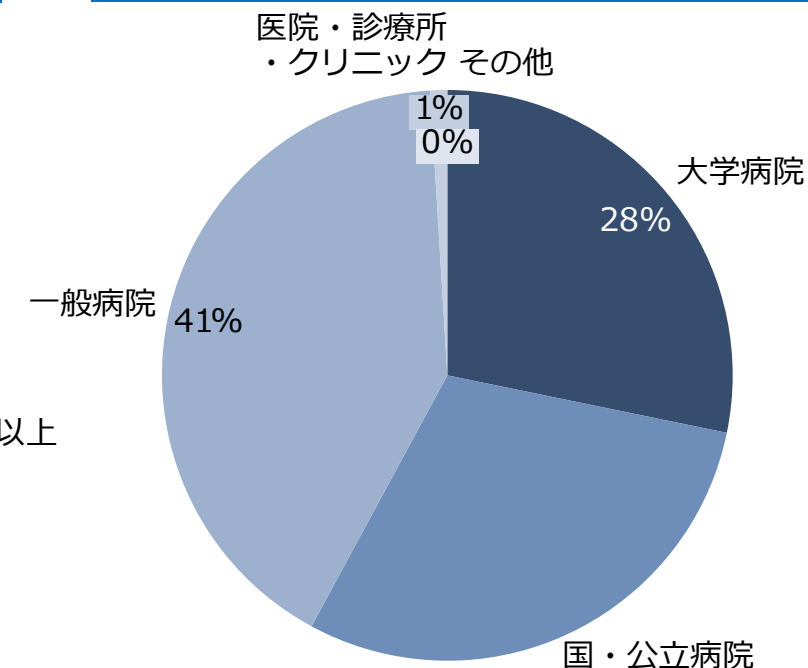
診療科



病床数



勤務先施設



SQ1.先生の主たる診療科をお知らせください。(SA)

SQ2.先生が主に勤務されている施設の、病床数をお知らせください。(SA)

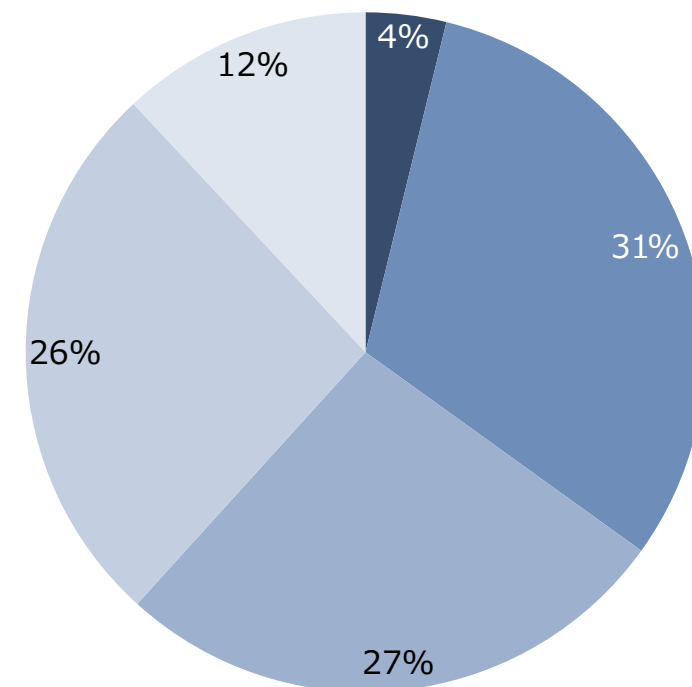
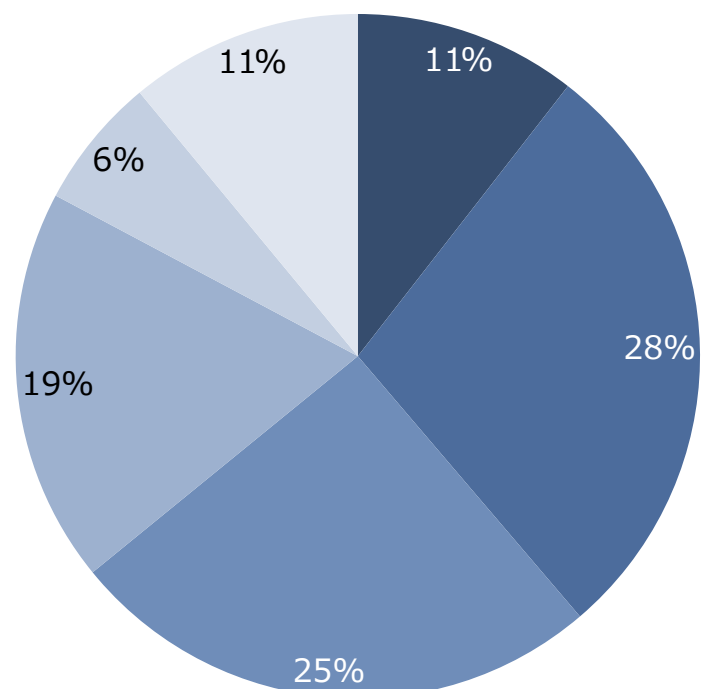
F1.先生の主たる勤務先施設をお知らせください。(SA)

勤務先エリアは関東が最も多く約3割、次いで中部、近畿の順だった。
年齢は30代~50代が中心で、それぞれ約3割を占めた。

勤務先エリア

年齢

(n=209)

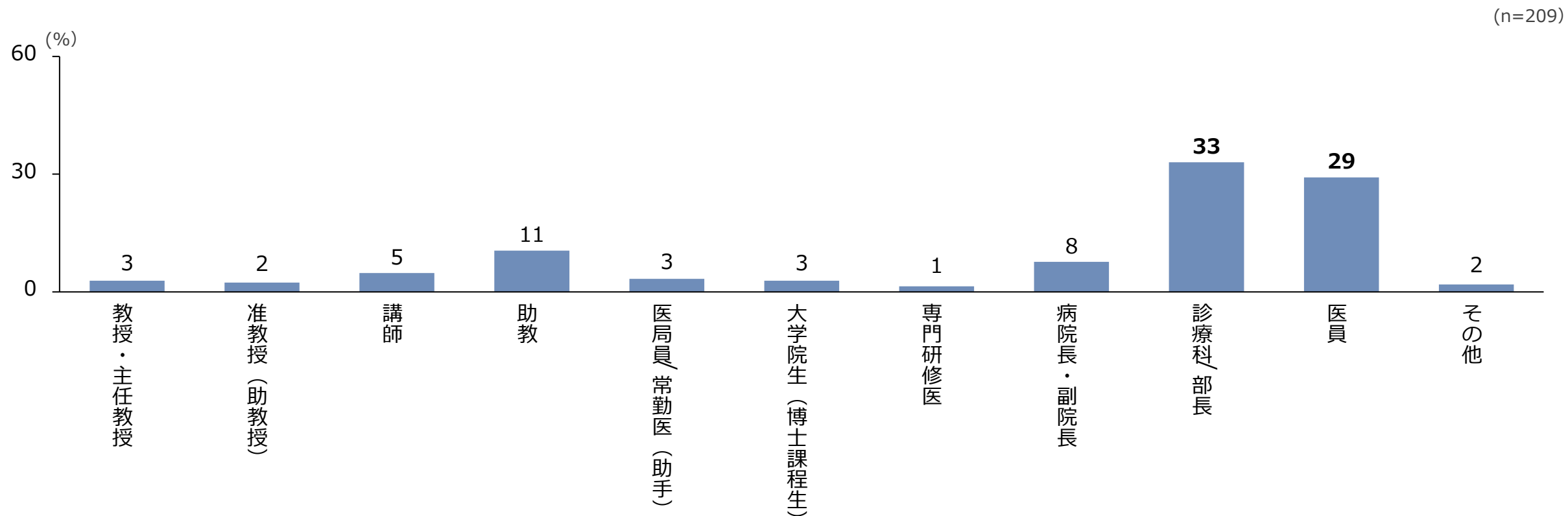


■ 北海道・東北 ■ 関東 ■ 中部 ■ 近畿 ■ 中国・四国 ■ 九州

■ 20代 ■ 30代 ■ 40代 ■ 50代 ■ 60代

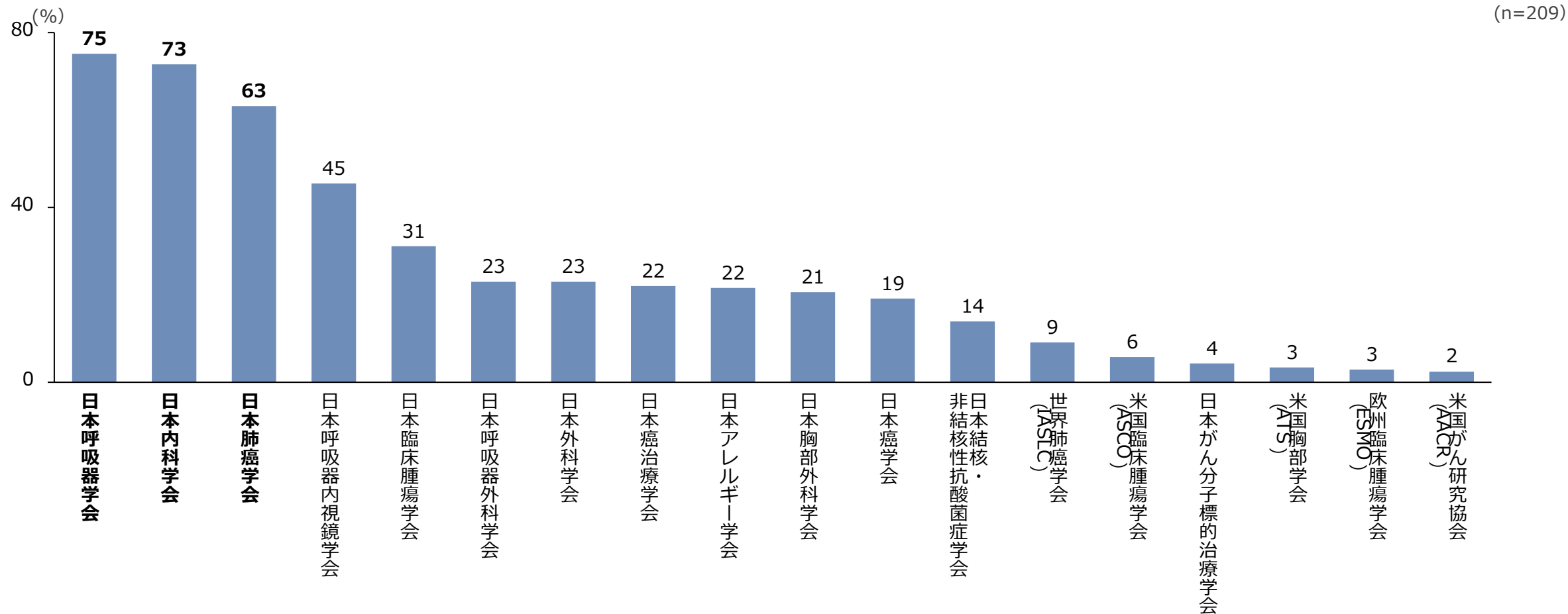
F2.先生の勤務先施設の所在地を教えてください。(SA)
F3.先生のご年齢(年代)を教えてください。(SA)

診療科/部長と医員で6割超を占めた。



F4.先生の勤務施設での役職名を教えてください

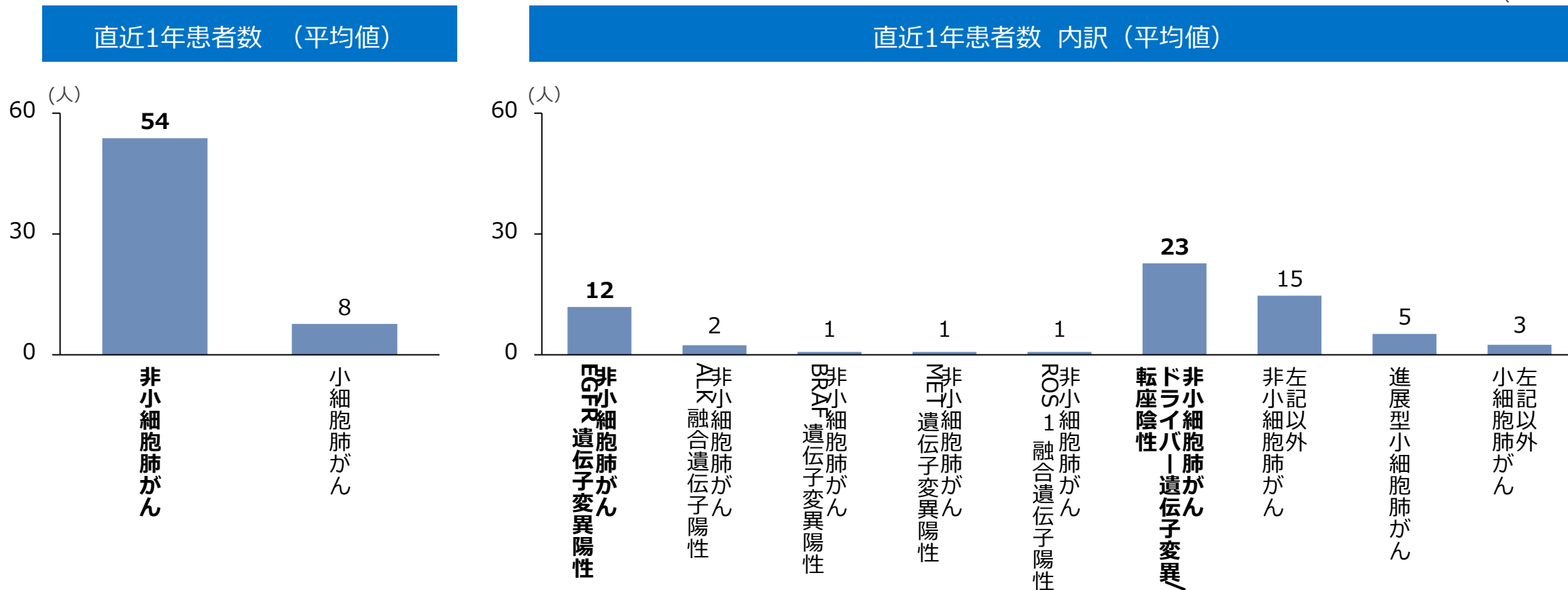
所属学会は、日本呼吸器学会や日本内科学会が多く、次いで日本肺癌学会であった。



F5.先生の所属学会/研究会をお知らせください。(MA)

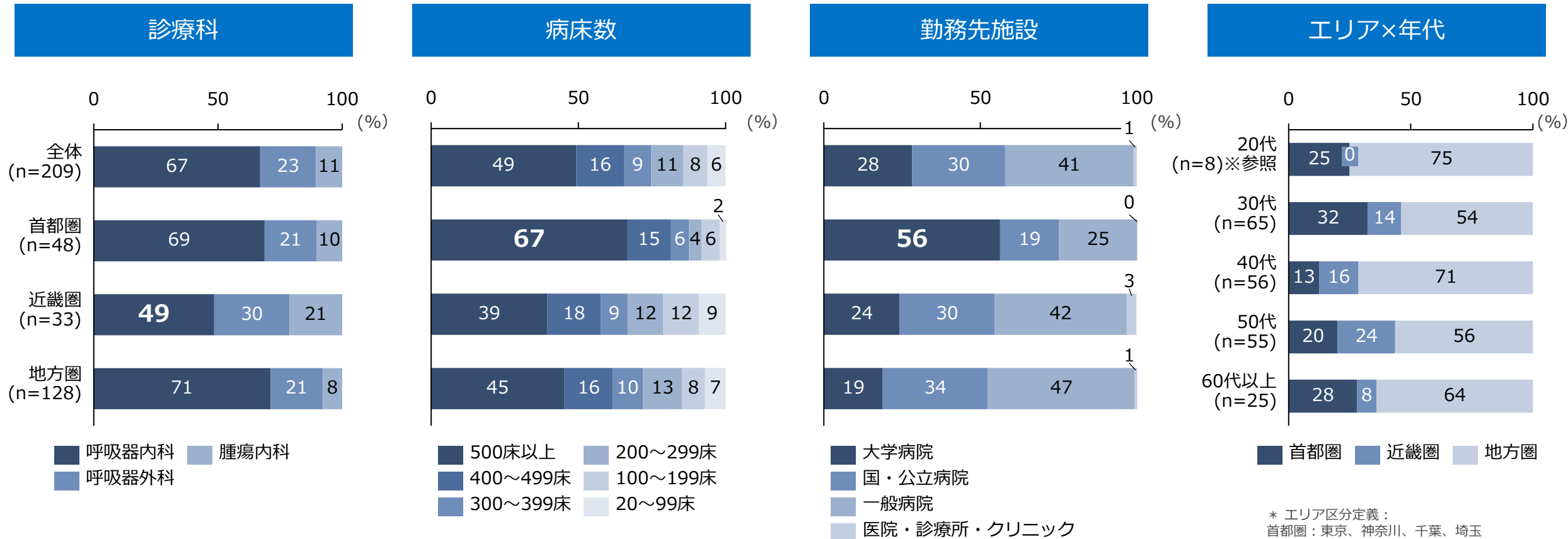
直近1年の平均患者数は非小細胞肺癌が54人で、小細胞肺癌の約7倍となった。
 非小細胞肺癌IV期に限定し患者数の内訳を確認したところ、ドライバー遺伝子変異/転座陰性が多く、
 非小細胞肺癌患者数の半数を占め、次いでEGFR遺伝子変異陽性が多かった。

(n=209)



Q1. 【直近1年未満】に先生ご自身が診療した、以下の疾患の患者数を教えてください。(数値入力)

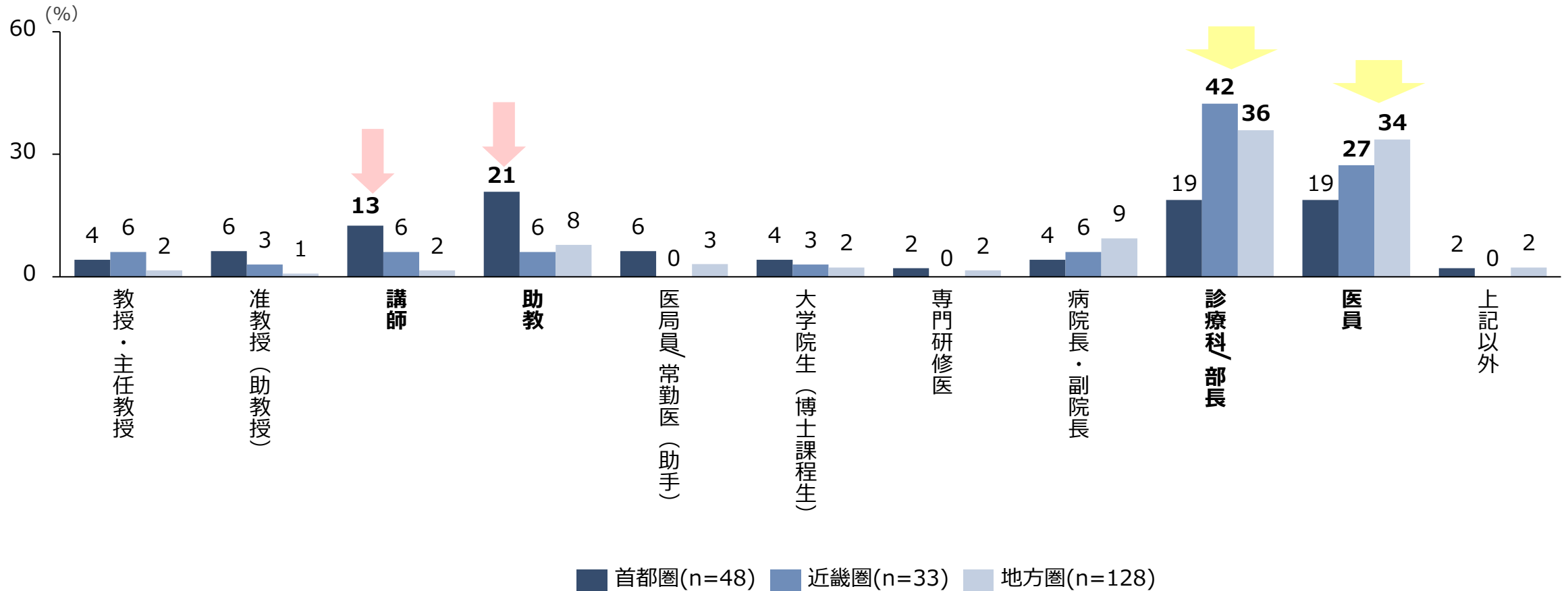
近畿圏では呼吸器内科医が少なく、他エリアよりも呼吸器外科医や腫瘍内科医が若干多かった。
首都圏では、500床以上の施設や大学病院の勤務医が他エリアよりも多かった。



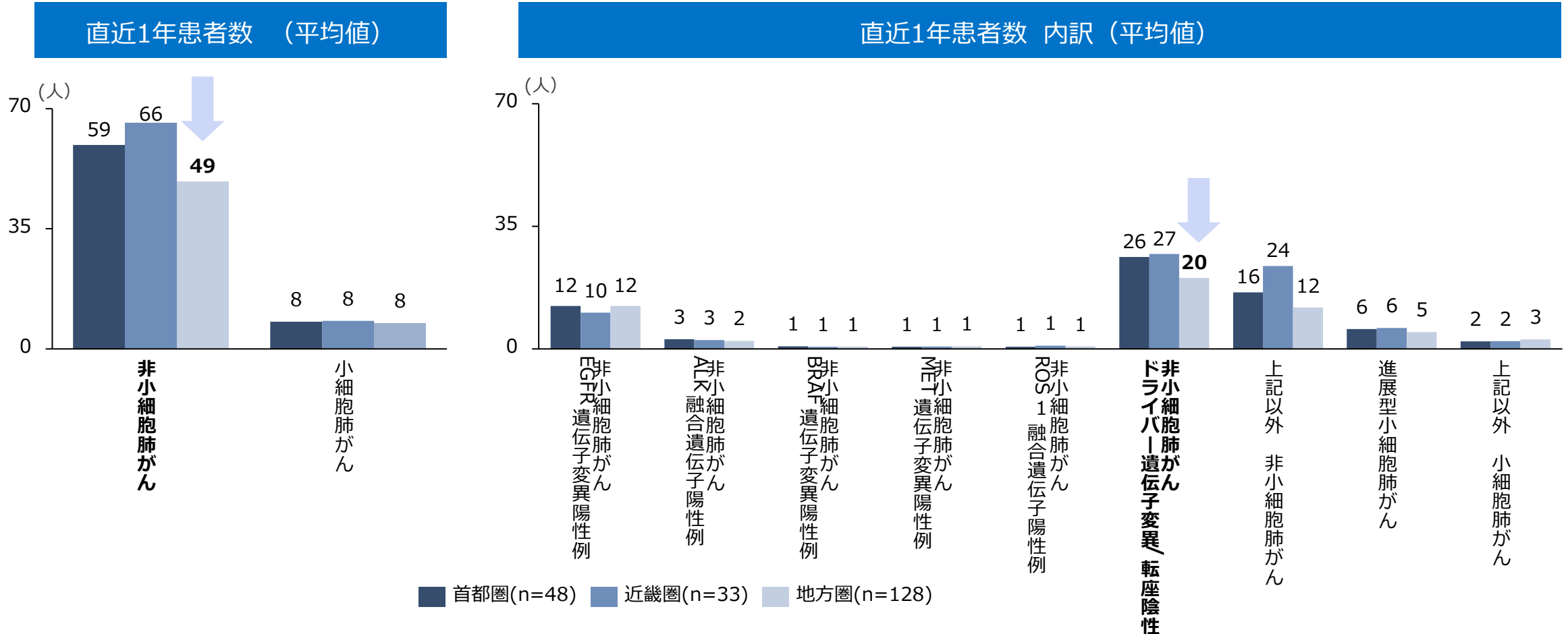
SQ1.先生の主たる診療科を教えてください / SQ2.先生が主に勤務されている施設の病床数を教えてください
F1.先生の主たる勤務先施設を教えてください / F3.先生のご年齢(年代)を教えてください

* エリア区分定義:
首都圏: 東京、神奈川、千葉、埼玉
近畿圏: 大阪、京都、兵庫
地方圏: 首都圏、近畿圏以外

首都圏では、助教や講師の役職につく医師が多かった。
 近畿圏や地方圏では、診療科/部長や医員の医師が多かった。



直近1年の患者数は、非小細胞肺癌が地方圏で若干少なく、特に非小細胞肺癌 ドライバー遺伝子変異/転座陰性で顕著であった。

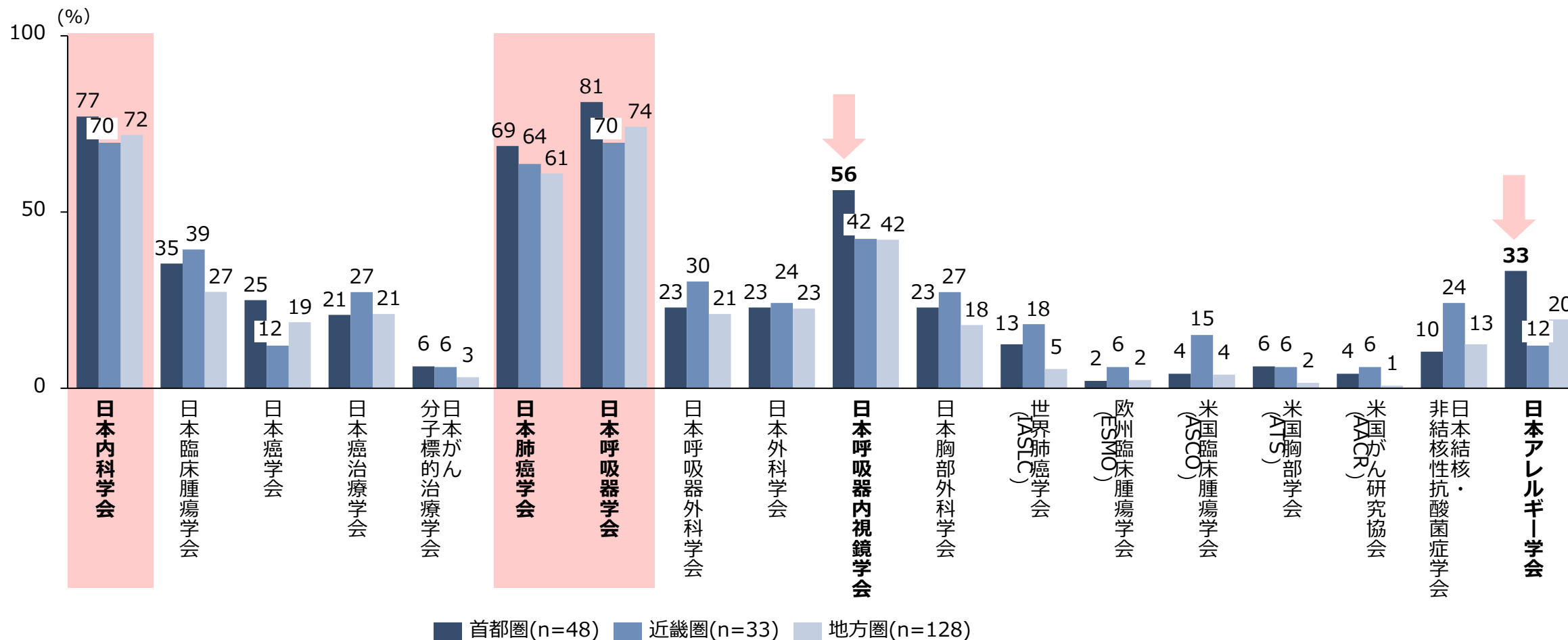


Q1. 【直近1年未満】に先生ご自身が診療した、以下の疾患の患者数を教えてください。(数値入力)

エリア別回答者属性-4（所属学会）

日本呼吸器学会や日本内科学会その他、日本肺癌協会に所属している医師が多かった点は各エリアで共通していた。

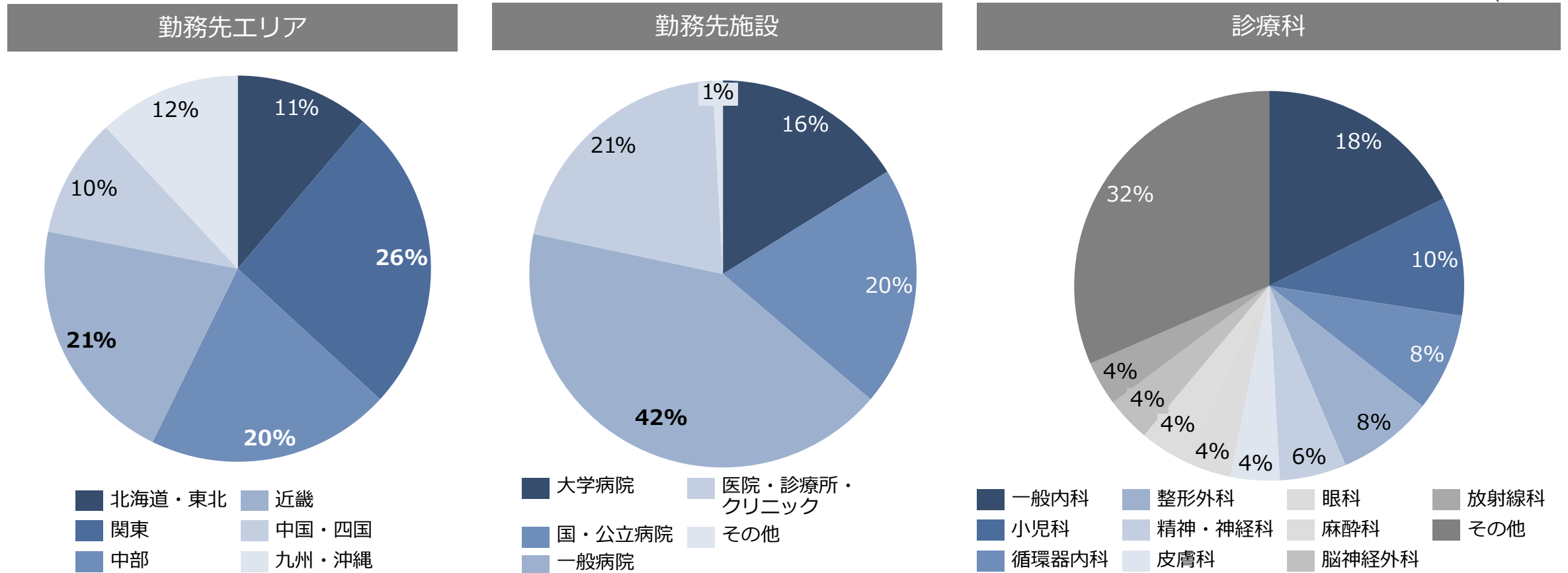
首都圏では、日本呼吸器内視鏡学会や日本アレルギー学会にも所属している医師が多かった。



F5.先生の所属学会/研究会を教えてください(MA)

勤務先エリアは関東、中部、近畿がそれぞれ2-3割を占めた。
 勤務先施設は一般病院が最も多く、大学病院、国・公立病院、クリニックがそれぞれ2割程度だった。
 診療科は一般内科が最も多く、次いで小児科、循環器内科だった。

(n=812)



F2.先生の勤務先施設の所在地を教えてください / F1.先生の主たる勤務先施設を教えてください
 SQ1.先生の主たる診療科を教えてください

* P.97以降の情報収集実態パートでの比較として実施した調査（肺がんの医師を対象としたものとは別調査）



Oncologist Fact Report

2021年 3月版



CONFIDENTIAL

本資料は、貴社社内関係者のみによって使用されるものとし、本資料のいかなる部分についても、株式会社メディカルトリビューンの事前の書面による承諾を得ずに、回覧・引用・複製、あるいは貴社外部に配布してはならないものとします。